

会 議 録

| | | | |
|---|--|---------|----|
| 会 議 名 | 平成26年度第6回社会教育委員の会議 (平成26年度三者合同会議 (研修会)) | | |
| 事 務 局 | 公民館運営審議会 (公民館) | | |
| 開 催 日 時 | 平成26年11月14日 (金) 午後3時から5時 | | |
| 開 催 場 所 | 市役所第二庁舎8階801会議室 | | |
| 出 席 委 員 (16名) ※石田委員 は2つの委 員を兼ねる | <公民館運営審議会委員> 藤井委員長 亙理委員 小島委員 山田委員 宮澤委員 <図書館協議会委員> 田中委員長 藤森委員 宮澤委員 石田委員 中里委員 則武委員 吉田委員 <社会教育委員> 中村議長 本多委員 石田委員 原嶋委員 小山田委員 | | |
| 事 務 局 員 | 前島公民館長 上石図書館長 石原生涯学習課長 山崎公民館庶務係長 若藤公民館事業係長 西村図書館庶務係長 伊東生涯学習課主事 | | |
| 傍 聴 の 可 否 | 可 | 傍 聴 者 数 | 0名 |
| 傍聴不可・一部不可 の場合は、その理由 | | | |
| 会 議 次 第 | 1 研修会 (1) 講演「地域住民として、子ども達とどう向き合うか ～現代の子ども達が抱える諸問題、SNS・ニート etc～」 講師 東京学芸大こども未来研究所理事兼主任研究員 小山田 佳代 氏 (2) グループ討議 (司会、発表者を決定) (3) 質疑応答 2 報告事項 社会教育委員の会議議長 中村 彰宏 氏 3 次回日程について 次回担当委員会 図書館協議会所管課 図書館 平成27年5月21日 (木) 午後2時～ 於：市役所第二庁舎8階801会議室 4 配付資料 (1) 講義資料 (2) 第二次生涯学習計画の評価についてのアンケート回答 (写) | | |

会 議 結 果

藤井委員長 公民館運営審議会委員長の藤井です。今年度の三者合同会議等の担当委員会となっておりますので、本日の司会を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

平成26年度三者合同会議を始めたいと思います。本日の内容は、お手元の書類にあるテーマで、私達が「地域住民として子ども達とどう向き合うか」、重要であり、興味深いテーマです。キーワードはスマートフォン、ソーシャル・ネットワークキング・サービス（SNS）でないかと私は思っております。子ども達は、私達の時代にはなかった現代の魔法のツールを自由に使いこなしております。このような状況の中で、子ども達がどのような影響を受けていくのかについて学習していくことで、現代の状況をご理解願えればと思っております。

今日の講師は、社会教育委員でもあり、NPO法人東京学芸大学こども未来研究所理事兼研究員でもある小山田佳代さんをお願いしたいと思います。先生の講義、質疑応答、発表、約100分ほどの長丁場になりますが、よろしくお願いいたします。

1 研修会

(1) 講演「地域住民として、子ども達とどう向き合うか

～現代の子ども達が抱える諸問題、SNS・ニート etc～

小山田講師 今ご紹介いただきました、社会教育委員でもあり、NPO法人東京学芸大学こども未来研究所理事兼研究員をしております小山田です。どうぞよろしくお願いいたします。では、ちょっと座らせていただきます。失礼します。

今日は「地域住民として、子ども達とどう向き合うか～現代の子ども達が抱える諸問題、SNS・ニート etc～」というお題をいただきまして、ご関心のあるところだと思っておりますけれども、これから50分ぐらいお話をし、その後、休憩を挟んで、各グループでまた皆様とお話もしていただければと思っております。

まず私のお話なんですが、今、SNS、ニートという、こういった単語でいくと皆様よくご存じだと思っておりますけれども、子ども達が今どのような背景にあるかというところをお話しできたらと思います。

お手元の資料を見ていただけますでしょうか。今の子ども達はどのような感じなのかというところです。これは第2回ベネッセ子ども生活実態基本調査からの引用ですけれども、お手元の資料のグラフは見えにくいと思うので、こちらのほうもちょっと見ていただければと思います。小学校、中学校、そして高校生ということではとっておりますが、見ますと、上が「とても満足している」で、下が「まあ満足している」というラインになるんですけれども、家族との関係とか友だちの関係というのはどの小中高もわりと満足されているんです。ここで一番問題というか、課題になるのは、自分に対して全然満足していないんですね。小学生はまだ半分ぐらい、中学生で4割ぐらいで、自分の性格ですとか自

分の成績に関しては、もう高校生なんて2割も満足していないという、自尊心の弱さが顕著にあらわれていると思います。あと、今の日本の社会に対しても、満足しているというのは2割、3割程度です。子ども達もそう思っているということなんですね。

これは今度、国際的な比較調査になります。今、自尊心が非常に弱いということだったんですけれども、じゃ、ドイツ、イギリス、フランス、韓国、日本の5カ国で比較してみるとどうかといいますと、一番左のラインが「とてもあてはまる」で、オレンジが「ややあてはまる」、次の「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」でいきますと、日本はみんな本当に、自分のことが好きであるかという問いにもあてはまらないんです。ドイツとかイギリスのほうはかなり皆さん自分にも自信を持っているという傾向があるんですね。

続いて、今度、友だちの数としてはどうかといいますと、友だちの数は、見ていただきますと大体、大勢、11人以上というのはあまり少ない感じなんですけれども、4人から10人ぐらいというのが半分ぐらいです。「日ごろよく話をしたり一緒に遊んだりする友だち」も結構いるんですよね。「悩みごとを相談できる友だち」というのも、わりとこの数字でいくとみないますね。4人から10人の中で大体いることはいるんですね。

続きまして、友だちとの関わりについてももう少し見ますと、「友だちといつも一緒にいたい」というのが、男子のほうは実は2004年と比べて増えているんですね。また、「違う意見をもった人とも仲よくできる」という人も増えているんです。女子のほうも増えているんですが、男子のほうは実は友だちといつも一緒にいて、違う意見を持った人ともすごく仲よくできる。また、「グループの仲間同士で固まっていたい」「仲間はずれにされないように話を合わせる」というのが、男子のほうが増えているんですね。「友だちが悪いことをしたときに注意する」というのも、男子よりも女子のほうに注意したり、そういった数字ですね。小学生全体ですと、「友だちが悪いことをしたときに注意する」は65%、「グループの仲間同士で固まっていたい」というのが52%ぐらいあるんですが、これで全体的なところで何が読み取れるかといいますと、要は、男子が、みんなと一緒にして、いつも仲よくして固まっていたいという。右下に書いてありますが、「おとなしく群れる」=草食系男子像というのがここでもちょっとあらわれてはいるんですね。

友だちとの関わりというところも見ていただきますと、「友だちといつも一緒にいたい」「違う意見をもった人とも仲よくできる」というところでいきますと、やはり主体性の弱さというのが非常に顕著にあらわれます。

なので、わりとみんな、じゃ、満足しているのかなと思うんですが、実はその満足度というのが低いんですね。自分が満足する部分というのはとても低く設定されていまして、そこに達すれば満足を得ているとい

うような、やはり自分自身のモチベーションというか、非常に低いところで自分の満足度を設定しているという傾向にあります。

今、集団の変化というところでも、どんどん小さい輪になっていまして、「島宇宙化」で、学級の中でも分断されるとともに、「序列化」というのも実は始まっていたりします。これはここに書いてありますが、勉強ができる、できないということではなく、上位というところが、見た目ですとかファッションセンスとか、場の空気が読めるとか読めないとか、部活だったり趣味とか、そういったようなことで上位、下位みたいな序列化をしていたりします。

「スクールカースト」といった言葉も今、出てきております。学校の中で相対評価を廃止するというところで、序列づけも否定するような、平等主義というところから、学業成績や運動能力というようなことでの特性のアイデンティティを失ってしまって、コミュニケーション能力というところで格付けをしていくというようなことが起こっているわけなんです。スクールカーストというものについては、ちょっと前にテレビでも米倉涼子さんが三十何歳で学校に入るというドラマがあったんですけども、そのドラマがまさにそういったことを題材にしたドラマで、学校の中でもカースト制度みたいな、階層化というようなものが始まっています。これはもちろん地域差がかなりありますので、小金井ではそんなにしないような気はしているんですけども、そういったような学校の中でも子ども達のカーストというのが始まったりしているということです。

特徴としてはこんな感じですね。一軍、二軍、三軍、A、B、Cなどというようなことで、これが過剰になってくると、いじめのような関係になってきますし、そういった要因になっていくということが行われているということも学校の中ではあるということです。

今言ったように、まず自分には自信が持てなく、自尊心がやや弱くなっている中で、学校の中でみんなと一緒に、自分の主体性を押し殺して仲よくしていく。でも、自己主張をあまりしない。下手したら、カーストで序列化があって、自分が下になったら大変だから、やはり周りの目を気にして、みんなとどうやって仲よくやっていけばいいだろうというような感じで過ごしている若者達というか、小中高ぐらいですけども、いるわけなんですね。

それで、次に、ソーシャル・ネットワーキング・サービスの話に入りますけれども、そういった背景の中で若者達がソーシャル・ネットワーキング・サービスのほうに没頭していくという、ちょっとその気持ちというのが、今の前半の話聞いていただくと、何かわからないでもないような気がいたしませんでしょうか。インターネットの普及というのがここにあります。今もう10人に8人ぐらいはインターネットを利用しています。スマホでできることって、たくさんございますが、わりと今メジャーなのが、Facebook ですね。皆さんもやっていらっしゃるかなと思うんですけど、これは2004年に誕生したんですが、世界では

もう12億人ぐらいが利用してしまっていて、実名登録プロフィールが公開されて、不特定多数へ発信するものなんですね。Twitterというのは、つぶやきと言われるもので、2006年にスタートしたんですが、今は1日当たりの投稿が、世界ですけど、5億件以上もつぶやかれているというものです。これは本当につぶやきで、気軽にいろんな人とつながっていけるということなので、本当にスマホで打って、ぴゅっとなったら、つぶやきとかいう感じで出るわけなので、いろんな人と登録したり、友だちだったりしてというような感じでどんどん広げることができるという感じですね。それで、わりと最近登場したけど、今非常に人気なのがLINEというもので、2011年に誕生して、今はもう世界で4億人以上、国内では5,000万人ぐらいが利用しております。特に10代から20代のユーザーが非常に多くて、これはOne To Oneのコミュニケーションツールで、電話とかメールでやるよりも、みんなLINEに入って、LINE同士でつながったり、LINEもグループとかもできるので、今、携帯ですと、メールよりもみんなLINEでやりとりしているんじゃないかなというところで、これはスタンプがあって、それがまた人気で、いろんなスタンプがあって、買ったりするようなスタンプもあって、そういうのもみんな若い人達の中では人気で、非常に急激に伸びています。オンラインゲームは、ネットにつながりながらゲームができて、今、無料のオンラインゲームというのが非常にたくさんございまして、そういったものも結構利用して、無料なのでどんどんそういったものにはまっていっちゃうという傾向があるということです。

数的にどんな感じかなというところなんですけれども、ネットを使用している時間というのは、中学生と高校生ということでありまして、大体高校生は1時間から3時間という人が多くて、3時間以上という人も結構いますね。中学生になると、まだ1時間未満という子達も多いので、1時間から3時間ぐらいが少ないんですけど、高校になると急に増えていきますね。あと、ネット依存という。ネットを使い過ぎて依存症みたいになっているという現象も実は起こっているわけなんです。これは本当に使い過ぎて、健康問題や社会問題、家族問題などを引き起こすぐらいになっている依存症という若者達も今、出ています。男子と女子とだったらどっちがというと、女子のほうが結構傾向としては強いかなという感じなんですけれども。

どういったようなことかといいますと、例えば、これは国立病院機構の久里浜医療センターの樋口先生の手記なんですけれども、事例として、「A君は中学受験を経て、私立の中高一貫校に入学をしました。明るい性格で、中学校ではクラスのリーダー的存在でした。クラスの友人に誘われて、中2から多人数参加型のオンラインゲームを始めました。しかし、このころは午後11時ごろには家族の就寝に合わせてゲームをやめていました。高校に進学し、1年の3月に小遣いで自分のパソコン

を購入してからエスカレートし、ネットゲームが深夜に及ぶため、学校の遅刻や欠席が始まりました。2年の夏休みには全くの昼夜逆転状況になり、午後から明け方まではゲームをする生活となりました。ゲームをしているときは食事も疎かで、お風呂にもほとんど入りません。ネットゲームを家族が注意すると、目をつり上げて暴言を吐き、強引にネットを切断すると大暴れするという状態で、家族は腫れ物に触るようにしています。高2の夏休み以降は部屋にひきこもって1日10時間から14時間ネットゲームを続けています。学校は退学となり、サポート校に入学したものの、そこにもほとんど行けていません。」ということで、そのクリニックにご両親が連れていらっしやったというような事例なんです。

本当に依存で使い過ぎてしまうと、そこまで行ってしまうという。でも、それはもう、いつそこまでなってしまうかもわからないような要因はあるかとは思うんですね。大体、男子に多いんですけども、男子のほうはやはりゲームのほうにはまっています、ネットサービスの中では、男子はロールプレイングゲームやシューティングゲームというようなゲームを結構やっております。スマートフォンでもできてしまうので、家でパソコンを買っていなくてもスマートフォンがあればそれでもできてしまうということで、また今、急激に使い過ぎという人達は増えているというような状況ですね。

本当に便利なツールではあるんですけども、身近にそういったものがあるということはあるわけなんです。年齢別に見た中では、やっぱり高校生が非常に多いんです。高校生が結構依存率というのが多いです。次に、中学生ですかね。中学生、高校生あたりがちょっとやはりネット系のほうに依存する傾向がかなりあるということです。

この動機ということが、ちょっと最初に言いました全体の今の若者達の様子の中から酌み取れる部分はあるんですけども、孤独感が癒され、自分の心情や考えを多くの人に本当はしてもらいたいたいけれども、リアルな仲間の中ではそれを出すのがすごく心配なわけなんですよね。

なので、そういったネットのようなところでつながりを求めて、つながりというのは、やっぱりみんな誰かとつながりたいし、つながることで自分自身も確かめたいという、そういった心情があつて誰かとつながりたい。また、いろんな日々のストレスを解消するというので、

FacebookとかTwitterではつぶやいたものがそれこそ全世界とかにもいるわけなので、今、ネットの後ろには私の友だちは何万人いますみたいな、結構そういったコマーシャルもやっていますけれども、そういったところでの友だちづくりみたいなところに若者達が関心を持っているというか、そちらのほうに行っているということなんです。

また、悪いほうでいけば、アクセスして、今みんな、やりとりはLINEとかでやっているんですよ。なので、そこに入っていないと仲間はずれにされるという、そういったようなこともあるので、別に自分はやりたくないなと思っても、お友だちがみんなそれに入っていて、みんな

なそれでやりとりをしているんだと言うと、そこに入らざるを得ないというような状況もあるということもございます。

本当はインターネットはあくまでもツールであって、そこを介して広がる人間関係とか、情報とかは本当にいろんな情報があるので、今まで調べるのも大変だったような、図書館とかに行行って調べなければわからなかったようなことも、ネットとかで本当にいろんな情報も得られますし、あと、ゲームとか動画もすごくきれいですよね。すごいきれいなので、興味を持って、いい方向で使えば非常に便利なツールです。

何事も正と負の二面があるんですが、負のほうの利用を考えてしまうと、何か内にこもったところの、ただのはけ口みたいなことだけでつながりを求めて使うとなると、ちょっと心配な部分が出てくるということはあると思います。

ですから、便利だというツールの方向に大人達がそういうふうを持っていくということが必要じゃないかとは思っています。今の問題をまとめますと、ネットに依存し過ぎますと、睡眠、覚醒の問題や、さっきもありました、御飯を食べなくなってしまってということで栄養失調、逆に全然動かなくて、食べて家の中にいるので、メタボや、骨が脆くなったり、体力も低下したり、あと、勉強しなくなってしまって、成績が低下したり、遅刻や欠席が増えたり、またちょっとネットゲームの課金とかそういうことでお家のお母さんのお金をちょっと拝借みたいなことがあって、金銭問題が出てきたり、補導があつたりというような、そういった問題までも発展していく。そういった要因はあります。なので、不登校とかひきこもりというのも今非常に増えていますが、全てがネットのせいではないと思いますけれども、そういう要因にもかなりつながっていくということもございます。

もう一つの「ニート」というものですね。ニートということをご説明いたしますと、ニートという言葉が実はイギリスで発祥しております。ただ、イギリスでは、教育、雇用、職業訓練のいずれにも参加していない16歳から18歳の若者のことをニートといいますので、ちょっと日本での使い方とは違うんです。日本でニートというのは、若年無業者のうちの、何かややこしく書いておりますが、要は就職をしたいけれども、就職活動をしていない、または就職をしたくないという人達をニートと呼びます。なので、フリーターとか失業者というところとはまたちょっと違うんですね。

フリーターは、点々としますけど、一応仕事もしているということで、失業者というのは、就職をしたいけれども、仕事がなくなってしまったということで、ニートというのは就職もしたくない、また、就職活動もしていないというような人達をいいます。

ニートも今、増えているということで、ちょっとお手元の資料では非常に小さくて申しわけないんですけれども、今、大体63万人ぐらいいるそうです。10年前から比べますと、かなり増えています。20万人ぐらい増えています。年齢別で見えていただきますと、20代の前半後半、

30代の前半の方達までだと大体同じぐらいの人数がニートということで、十七、八万人という人数がおります。求職活動をしない、できないでいるというところで、非常に小さくて申しわけないんですが、病気やけがのためというのが一番多いんですけれども、やはり知識や能力に自信がないからというのが次の理由として多いんです。何か自信がないからということが求職活動をしない理由の中でも大きな位置を占めているということが言えると思います。

こういったいろんな現象が今起きているわけなんです。先ほども言いましたように、いい方向で使えばネットもすごく便利なものなんですけれども、やはり使い方を間違えると、本当に健康を害するような、そういった問題まで出てくるところまで。若いので、制限がわからず、のめり込んでしまうという部分があると思うんですが、そういった危険ももちろんはらんでいるということで、じゃ、周りの大人達がそこにどういふふうに関わっていくか、どうするかということが次のお話になってくるんです。

後半は、それでは、私達が子ども達とどういふふうに関わっていけるのかということなんです、皆さんいろんな活動をされていらっしゃると思うんですけれども、その、ちょっと振り返り的なこともあります。子ども達の成長というところを見る図なんですけれども、子どもが経験を通して築く「自の世界」を真ん中の中心部分にいたしますと、自分の世界が外の輪にどんどん広がって行って子どもが成長していくというふうになるわけなんです。その成長していく中に、左の赤いところですね。「中間領域＝学びの世界」ということで、新しい世界を知るためには、やはり案内人、誰かガイドをしてくれる人が必要ではないかということです。ガイドさんがいて、無限にいろんな学びや遊び、交流、伝統、地域ということを知っていく。親や学校の先生達もこの中には入ると思うんですけれども、そういった学校や家庭ではないところで、いろんな遊びだったり、学び、交流、また、伝統・文化などは、意外と地域の中で新しく知って広がっていくということが結構あるのではないかと思います。

「ガイド」としての大人の役割というところでもう少し細かく見ていきますと、大人の中でどんな種類の大人がいるかというところで、まず、「自の世界」の付添人、世話をする人としての大人。これはお母さんやお父さんや世話をしてくれる大人ですね。次の「中間領域」のガイド、育成する人としての大人という人達が、けん玉をやるのに、地域でけん玉名人の人がいて、けん玉を教えてもらったりとか、そういったような感じのことで、それから、「他の世界」の代理人という、見守る人としての大人。これは別に何かを教えてくれるわけではないんですけれども、例えばプールの監視員みたいな人ですね。特に教えるわけではないんですが、子ども達の安全と安心を見守るということで、見守るだけの大人というような役割があるのではないかと。世話をする人が家庭で、

下のほうに来るほど外の世界、地域というような形で延びのラインがありますが、そういった分担と連携で、こういったいろんな役割の大人の人がいて、みんな地域で育てるということが必要ではないかというお話になります。

また、別の形の分類なんですけれども、社会関係の3種類という中で、大人が将来の人間関係のモデルになっていくんだというお話なんです。

まず、「他」人と、「他」者と、「他」己という分類をさせていただいていますが、他人というのは、知らないけど、関わらない。なので、通勤電車に乗って隣に立っている人とかですと、知らないし、関わらない。変に関わると、何か怪しい人に思われますし、ちょっと隣にかっこいい人が立っていても、そこでいきなり声をかけたらやっぱり変な人と思われるという感じですよ。知らないから、関わらない人。それから、他者というのは、知らないけど、関わる人。これは例えばコンビニの店員さんみたいな感じの方達で、知らない人ですけれども、レジで幾らですかとやってもらって、「レンジであたためますか。」「お願いします。」とか言って、一応関わってはいますよね。でも、その人のことは知らないわけです。知らないけど、関わるというような、他者というようなことがまずあります。それから、他己。これは知っているけど、関わる。

家族ですね。知っているから、関わる。ということで、知らないという場合はそこでルールや規範性というのが必要で、関わるという方向で来ると、今度は親密さや共同性というものがでてまいります。こういった知らないルールと知っている親密さという、うまく両方があるということで、社会性が子ども達も身につけてくるというようなことになるんですけれども、今現在、さっき言いましたのはSNSとかそういったメディアの技術革新によってコミュニケーションの構造が変容しております、他者という、真ん中ですね。子ども達の場合、知らないけど、関わるという人達が結構いなくなっているんです。

例えば、携帯電話などで電話をすることがもうほとんどですけれども、私なんかもまだ子どものころは携帯はなくて、家電でしたので、ちょっとお友だちに電話をしようと思ったら一応、「〇〇ですけれども」と言って、絶対お父さんとかお母さんとかがまず出られて、そこで「私は〇〇ちゃんのクラスの友だちで、ちょっと宿題のことを聞きたいんですけど、いますか」というようなことを一回しゃべらないと、本人に電話ができなかったわけなんですけれども、今はもう直接携帯で、「ああ、〇〇ちゃん」って、いきなり出ますよね。そういったようなことでも、何か今までだったらその人を介して次のところというように、間に入る、知らないけど関わるというような人達がどんどん生活の中から排除されている環境になってしまっているということはあるわけなんです。

なので、若者達はあえて関わるのが苦手になっています。例えば、旅行に行くとして、旅館に泊まるか、ホテルに泊まるかとなったときですと、きっと若者達は、ああ、もうホテルに泊まるというようになると思うんです。旅館ですと、いわゆる仲居さんとかがいらっしゃって、もち

ろん知らないけれども、初めて会うのに、「ああ、どうも」って、知らない人に御飯をよそってもらったりとか、お風呂に行って帰ってきたら、知らない人に布団を敷いてもらっていたりとか、そういった関わりをしなくちゃいけない、そういう人達とも話さなきゃいけない。でも、例えば次の日が雨で、予定をしていて行きたかったところが雨で行けなかったというような場合は、そういった仲居さんなんかにはちょっとお話をすると、「ああ、じゃ、ここへ行ったらいいんじゃないですか」と本当はいろいろ教えてくれたりするわけで、知らないけど、うまく関わることができるというような、そういった関係を非常に苦手ということで、若者達はどんどんそういう他者と関わるということが非常に少なくなっているわけなんです。

最初にちょっとお話ししました、他者と出会うということが、新しい学び、新しい世界につながっていくという。なので、いろんな他者の方達と出会うことで子ども達の豊かないろんな学びにつながるんですが、他者とつながっていかないのを嫌っているの、どんどん衰退していくという部分もあって、ネットとかそっちのほうの世界だけになっていっているのではないかというふうにも思われます。

他者の特徴というのは、ほかの世界へガイドをしてくれる人なので、知らないけれども、自分の世界を守って、関わってくれる人なので、ルールと親密、こわさとやさしさと、距離も置いているけど、でも、ある面では近いという両面を同時に持っているような人のことを他者といいます。なので、わりと子どもにとっては、「何かあのおじさん、変だな」とか、「あのおばさん、ちょっと変わっているよね」みたいな感じの大人がわりと子ども達は好きなんじゃないかなという。わりと子どもと一緒に遊んでくれたりして、へえーっと子どもに思わせたりとか、それが親でも先生でもお友だちでもない、別の大人が必要ということなんです。

そういったことで、子どもをサポートするというスタンスとしては、世話や育成や見守りという3種類の大人が必要で、これがやがて社会関係のモデルとなり、また、成長を直接支える他者との体験というのを子ども達に豊かに与える、地域からの教育参画の意味があるのではないかと。また、現代社会では、まとめですけど、子ども達の育成する大人、他者というのが、非常に体験が貧窮しているということなので、子どもの支援には近さと遠さの両面を同時に持っていくという必要があるということになります。

じゃ、大人にとって子ども支援に関わる意味というのがどうなんだろうと考えますと、大人にとっても実は子どもと関わることで非常に学びにもなるということもあると思います。大人同士もさまざまにつながりを持つこともできますし、それが自分自身の生きがいにもつながったり、また、子どもの成長を見ることで自分も成長させてくれる、逆に子どもが自分にとっての他者ということにもなり得る。こういった子どもを支えていくということで地域のコミュニティーが活性化して、非

常に住みやすい環境を自分達で整備をしていくということにつながっていくのではないかとこのようなことがございます。例えばとありますけれども、子ども、また高齢者にとっては、地域というのは特別な意味があって、いろいろな資源。地域資源。人もそうですし、いろいろな場所だったり、自然だったり、いろんな地域の資産があると思うんですけれども、そういったものをどうやって子ども達に伝えていくかというのは他者である大人の役割ということで、それも大人にとっても非常に学びになっていくのではないかとことです。

これがこのような子どものつながりということで、地域のつながり。大人同士、大人と子ども、子ども同士というようなことで、大人同士も、大人と子どもも、子ども同士もいろんな地域のつながりが出てくるということで、いろんな子ども達と一緒に活動をサポートしていくというような地域になっていけば非常に豊かな地域になっていくのではないかと思います。

なので、SNSとかニートという現象も今、起こってはいるんです。これは後半、皆様でお話をさせていただきたいと思うんですけれども、どうやって大人達がそういった子ども達に関わっていくか、関わっていけるきっかけというのがどういったことでできるのかというのが課題になってくるとは思うんです。小金井の地域性ですと、やはりまだ家庭とか学校のほうで非常に活動はもちろんしていると思うんですが、まだ社会教育の中での子ども達との関わりというのはまだまだもっとも関われるんじゃないかと実は私は思っています。

その中で、私どものNPOも、子ども中心に、地域の子どもは地域で育てるんだということを合い言葉に掲げまして、いろんな地域で大学の知を地域に生かして、そこの地域でみんな育てていこうというようなことでいろいろ講座をやったり、イベントをやったり、そんなような活動もやっているんです。今、文科省のほうからですと、このサイトをまた見ていただければと思うんですが、「学校と地域でつくる学びの未来」ということで、土曜日の教育活動の推進ですとか、小金井でも放課後子ども教室をやっておりますし、あと、学校支援地域本部というのもございます。小金井のほうも今、学校支援地域本部も試行の段階で、これからというところだと思うんですが、このサイトを見ていただきますと、全国のいろんな事例が出ています。

放課後子ども教室も、小金井もやっておりますけれども、他地域でもこれが子ども教室なのというぐらいな活動をされていたりとか。例えば、毎日夏休みもずっとやっているという放課後子ども教室とかも実はあったりしまして、本当に地域の人がいっぱい入って、いろんな遊びを展開したり、そういった活動をされる放課後子ども教室もあります。

学校支援地域本部というのも今、中学校もあるんです。地域の大人達が学校の中に入って、授業のサポートをしているような人達もいますが、もちろん花壇の整理みたいなこととか図書の整理とか、そういったような環境整備をやっていらっしゃる方もいまして、すごくやっているところ

ろだと、給食とかも地域の人達と一緒に食べたりとか。そういったようなところで、中学生とかになってくると、放課後の時間でどうやって地域の大人が関わろうかという、何かイベントとかをやっても、中学生とか高校生って、なかなか集まってこないかなというのがあるとは思いますが、そういった中で、でも今回、今日は図書館や公民館というような委員の方もいらっしゃるの、そういったところでもどうやって中学生とか高校生とかを生かしていけるだろう、来てもらえるだろうというようなことを多分いろいろ考えていらっしゃると思うんですけども、学校の中に入ってしまって、学校支援で、逆に学校の中で関わるといようなこともあったりするわけで、いろいろな方法で大人から、中学生や高校生、小学生もですけども、関わるきっかけというのを、今までですと自然に地域の中でそういった関わりができていたんですけども、小金井はまだ子ども会ですとかそういった支援関係のものも残っているほうだとは思いますが、でも、やはりなかなか子ども会活動とかも、お世話をする人がなかなか出てこなかったりということで、また、あえてそういった地域のつながりというのをつくっていかないと、なかなか関われなくなっているという現状もあると思うんです。

そういったところを今日お集まりの社会教育委員、それから図書館や公民館の委員の皆様とまた一緒に考えて、そういった子ども達と、まずは関わるということをつくって、それからさらに一歩二歩とどうやって若者達と話していったり、みんなで地域ぐるみで育てていくというような小金井がしてくれるのかということをもたまたま考えていけたらと思っております。ぜひこのサイトはまた見ていただければと思います。本当に全国の多彩ないろいろな活動があるので、非常に参考になるかと思っておりますので、ぜひごらんください。

ということで、ちょっと足早ですが、私のほうのお話は終わりにさせていただきます。ありがとうございます。（拍手）

藤井委員長

どうもありがとうございます。この後、大体1テーブルに4人で、グループ討議という形になるんですが、これは先生、どういうふうに進めていったらいいものですか。

小山田講師

とりあえず休憩をしていただいて、その間にグループでどなたか進行役をつくっていただいて、あと最後は発表していただきたいので、どなたでもと思うんですけども、発表していただければということで、まず決めていただいて。まず前半の私のお話の感想とかをお話しいただいて、小金井の今の現状とか課題をお話しいただいて、次に、じゃ、自分達は何ができるんだろうというようなところまでお話しただければと思うんです。

どうでしょうか。進行役はどなたでもいいんですが、各グループでじゃんけんで決めていただければと思います。休憩中に決めていただければと思います。

藤井委員長

わかりました。そうしたら、今、10分前なので、ちょうど4時からグループ討議を始めましょうか。その休憩中に、進行係、最後の発表の

方を決めていただいて、今の感想だとか現状だとか今後の課題、どう思っているよとか、それから最後に、自分達だったらこういうことができるんじゃないのという形でまとめていただいて、大体30分ぐらい時間をとりたいと思います。

それでは、10分ほど休憩します。

(休 憩)

(2) グループ討議

藤井委員長 グループとしての結論は出ないのですが、共通の話題で皆さんで話し合う機会が持てたことがよかったかと思っています。グループで発表された話題について、発表してみます。LINEでつながったことが本当の友だちなのか、仲間はずれにされることを嫌がってつながっているのは、本来のつながりとは異なるのでは。

じゃ、私のところのグループの話でちょっと出てきたので紹介しておきますと、携帯の利用方法。これはもう今の現状ではどうしようもないと。スマホを買わないよと言っても、彼らはどこかでバイトしたり何とかして買うだろうと。ああいうのをやめさせるのは、小遣いの道を絶てばという話もあるんだけど、それもなかなかできない状態だと。これは現状、このままで続けていって、子ども達が自分で気づいて、これは具合悪いなと子どもながらに感じてくれないと、もう方向転換できないねというのが本当の感想じゃないかと思うんです。

それと、子ども達が、LINEでつながった友だち同士だという状態が本当の友だちなんですかということ、ある意味、子ども達が自覚してほしいなと。あの〇〇ちゃんとながっていないといじめられるからとか、今度の誕生日パーティーに呼んでももらえないんだよねというようなレベルのつながり方は、子ども達にとってはつながっているのかもしれないけれども、これが本当のつながりなのかなということも出ていましたね。

それともう一つ、大きな問題になってくると、現状こうなっているのは、社会問題だとか家族問題だとか、こういうものが根っこのほうでこんがらかってしまって、現状、私達がどうしようもできないところから、じわりじわりと発生してきた問題も相当あるので、やっぱり気持ちとしては嫌なんだけれども、この状態がだらだら行くんじゃないのというのが私達のグループの感想でした。

こういうことを話し合えた30分間はある意味では楽しい30分間だと私は思いました。

あと、ありませんか。山田委員のところ、どうですか。

山田委員 うちは3人なんですけれども、雑談で終わりました。

それで、さっき出たようなLINEでつながったとかそういう具体的な話はしなかったんですけど、地域の人達との関わりということで、ある田舎のほうに行くと、子ども達がみんな知らない人にでも挨拶をすると。考えると、私なんか子どものころはちょっと田舎にいたん

ですけれども、知らない人にも学校から帰ってくる時は挨拶をするというのがありました。今は田舎のほうもどうかわかりませんが、多分都会のほうでは全くそういうことはないですね。

それから、体験活動って、さっきパンフレットを配られて、そういうのも大切だということですが、子どもが塾通いとかいろいろあって忙しいからそんなことはできないんじゃないのというような話がありました。体験活動というのは、学業一点張りではなくて、発言された方は山の登り方と言われましたけれども、いろんな登り方があるので、そういうものも知っておく必要がある。それは大きくなってからはちょっと難しいところもあるので、小学校低学年ぐらいから体験活動を通じていろんなことを知っておいたほうが良いというような話が出ました。

それから、ちょっとこれは私がいろんなことをやっているもので、先生も言っていたんですけれども、さっき話に出た学校支援本部。小金井では今、試行ということで、一小と三小と緑中でそういうのが行われているということで、そういうのが仲介というか、コーディネートしてくれば、地域の人といろんな関わり合いもできるのではないかと思います。

それから、これも私なんですけれども、今、小学校5年生で稲の栽培をやっているんです。その支援をやっているんですけれども、食育ということは大切だねという話も出て、あとは、昔は子ども達もよくできていたんですけれども、稲の束を縛ることができないとか、鎌は危ないから使っちゃいけないとか、あまり子どもにいろんなことをさせていないんじゃないかという話ですね。

今はとにかく便利になったので、そういう昔みたいなことには戻れないんじゃないかというような、そういうことも出ました。以上です。

藤井委員長
原嶋委員

それでは、次のグループ、お願いします。

私のイメージとしましては、自尊感情や子どもの居場所、最後はメディア対応まで持ってきて、さあ、じゃ、私達が地域や子ども達のために何が出来るかということを考えていたんですけど、ほとんど自己紹介とつぶやきということで大体終わって来ました。

皆様、いろいろ知見がある方なので、それぞれお話を伺った中で、まず小金井の子ども達の実態を知ることが大事なのではないか、本当に大きく変容しているんだよということを私も教わりました。私も小金井は長いんですけれども、確かに子ども達は、やさしい、おとなしい、お勉強が好き。好きかどうかわからないですけど、できる。だけど、今は随分変容しているんだな、そういうようなことの実態をもう少し把握しながらどう対応していいのかということを考える必要があるのかなと思います。

また、これは行政的にいきますと、学校教育ですよ。先生方の多忙さ。自尊心なんかでいいますと、やっぱり先生方は一生懸命子ども達としゃべる時間があって、頑張ったねなんていう、そういう話の場面が少ないのかもしれない。もっと根本でいうと、家庭ですよ。塾だとか

部活とか遊びたいんだけど、でも、お母さんともしゃべりたい、お父さんともしゃべりたい。子ども達は本当に忙しい。そのときにふっと支えてくれる家庭、振り返る家庭がやや寂しいのかなという話も出てきました。

最後に、大学の先生がいらっしゃったものですから、小学校、中学校、高校、いろいろ悩みながら子ども達が育ってきている、その集大成というのはオーバーですけれども、大学に入る。どうも大学の実像も昔と随分変わってきているらしいです。入学式、卒業式は、お父さん、お母さん、おばあちゃん、おじいちゃんを動員してくるというような状態もあるし、身辺的自立という言葉なんですかね、そういったこともできていないのでは。つまり、自己責任をきちんととれない。昔でいう中学校、高校レベルのところは大学まで上がってきている。いろんな意味で、中学校、高校でいろんなことをおっしゃる方、実はそれも大学まで上がってきている。そんなことも話が出てきました。

私の当初の目論見が脆くも崩れまして、こういう形で、じゃ、我々はどうしたらいいか、その辺まではおよそ届いていないということです。以上です。

藤井委員長 ありがとうございます。それでは、最後のグループ、お願いできますか。

中村議長 社会教育委員の中村です。我々のグループでは、小山田さんのお話をお聞きして、まず前段部分のSNSですね。それは後段の大人の役割を引き出すための導入ではなかったんじゃないかというお話が出ました。

それから、例えば地域の教育力アップということで、地域って、今、連携し過ぎても息苦しいのではないか、がんじがらめにし過ぎるのもよくないんじゃないかというお話も出ました。

それぞれ各委員の方々から個別のお話がありまして、SNSとかいろいろありましたけど、個別ではどんな実践をされているかというお話が出た中で、一つおもしろい事例がありましたのは、例えばご自分のお子さんをよその家に預けられて、そしてほかの家の大人はどうだというような体験を自分の子どもにさせてあげる、そういった価値観の多様性を認識させるような育て方をされている、ああ、なかなかすばらしいご家庭だなというふうな事例もございました。あるいは、ほかの意見としては、今、きたまちセンターがいろいろ頑張っていますね。社会教育に取り組んでおられる中で、マジョリティーというよりもマイノリティー。例えば子どもの中においてはひきこもりとか不登校、そういったマイノリティーへの温かな視線をもっと社会教育の現場、きたまちセンターなどで、そういった運営の方針の中でマイノリティーへの配慮をもっとしていく必要性もあるんじゃないかということがありました。

それから、大人の役割ということで、我々委員がどういった形で子どもの育ちに関われるのかということ、これは最後のまとめになると思うんですけれども、その中で、例えば学校運営協議会を設置しているコミュニティスクール、そういったところへの積極的な参加とか、そうい

ったことを心がけていってはどうかということです。それは例えば学校支援地域本部という、これも文部省が推進していますが、そういったところへできる限り時間をつくって我々大人が飛び込んでいって、地域の教育力アップのために何かできないかということが我々のグループでは話し合われました。

藤井委員長 どうもありがとうございました。最後のグループの発表が何か一番充実していたように私は思いました。ありがとうございました。

(3) 質疑応答

藤井委員長 それと、前段を通しての質疑というか、これだけは今日は聞いておきたいというものが何かありましたら。どなたかありませんか。話が大き過ぎてなかなかというところですかね。

じゃ、何もないようですから、私から、要は、一番理想的なスマホの使い方って、どのようなものを想定されていますか。これが一番いいよというの、何かないですか。

小山田講師 一番いい使い方ですか。でも、大人は便利に使っていますよね。

藤井委員長 そう。大人は別問題としてね。

小山田講師 大人は便利に使っていますよね。だから、何かルールを決めたりとか。それは家庭内ですけど、時間とか制限するとか、ルールを決めていくというのが一つあるかと思うんです。でも今、変なサイトに行かないようにとか、そういうのは制限できるようにはなっているので、そういうのは多分お子さんには皆さんも言っていると思うんですけど、そういうのをもう一回ちゃんと見直してもらったりして、そういった制御みたいなものやっていたりとか。だから、子ども達にも、便利に使えば便利なもので、でもどんな危険があるかということも教えていくという。それこそ時間がとれるかなんですけど、危険な面も教えていくというの必要なのかと。その中で自分達が時間とかもそんなに長くやらないという中で、でも、実際に友だちとのやりとりで必要な部分もあると思うので、そのあたりを。だから、子どもとスマホだけにしないで、大人もどういうふうに使っているのかということも見っていて、ちょっと危ないなと思ったら注意するような、見られるような関係になっていけばいいのかなと思うんです。確かに便利だし、使うと言えないようなぐらい、もう広まってはいるので、使い方をうまく。大人も見守りながら使えるような環境になっていけばいいのかなと思うんです。答えになっているのかどうか分かりませんが。

藤井委員長 要は、使う側の意識改革というんですかね、そういうことじゃないかと思うんですけども、やっぱり参考書とか授業とか自分のスケジュール管理だとか、そういうものがあの道具一つでできるので、使えば便利ですよ。ある意味、便利だけを追求していくと、先ほどの例題にあったような問題になってしまうのかなと私も思うし、家族内で一緒に見るということも一つの方法。これは多分私達が子どもの時分、テレビができたときに、4人家族、5人家族で1台のテレビを見ていましたよね。

その中で同じ話題でしゃべったというようなことを考えてみると、幾らスマホが1人に1個じゃないんだけど、ああいうものを中心に家族でしゃべっていくこと。今出ましたけれども、そういうのも、全部が全部じゃないけれども、一つの方法じゃないかということでしょうね。

小山田講師
藤井委員長
小島委員

はい。そうですね。

ほか、何か特に。どうぞ、小島委員。

公運営の小島と申します。先ほど中村委員のほうからも発表があったと思うんですけども、公民館のほうに、もう何年も続けている講座で、子どもの人権講座というのがあるんです。それで、去年も「SNSと子ども達」というタイトルでやった部分もありまして、今年も自己肯定感をテーマにしたような連続講座を来年の5、6、7月ぐらいにやりますので、ぜひお時間がある方、市報に案内が出るとお思いますので、聞きに来ていただけたらなど。ちょっと宣伝なんですけれども、公民館はやっているぞというアピールも含めてしたいとお思います。よろしくお願ひします。

藤井委員長
田中委員長

ほかに何かありますか。

図書館協議会の田中です。こんなことを言っているかどうかちょっとわからないんですけども、私、SNSとかそういったことはあまり詳しくわかりません。ガラケーというものを使っておりまして、つながっていないと本当に苦しかったり、つながっているがゆえに苦しいという学生もよく見てはいるんですけども、それが小学生や中学生になった場合に、やっぱりすごく大変だなという気はいたします。

それで、それを与えたときに、そういうこともある、あるいはそういう痛みというか、苦しみというものもあるということをお前提にしながら、そういうことはあるんだよということをお伝えた上であなたにこれをお与えると。困ったときは言ってもらわなくちゃ困るけれども、でも、それもあなたの責任というところがあるんじゃないのということをおちょっとお思ったんですね。つまり、誤った方向に行かないように行かないように、右に行ったら注意して、左に行ったら注意してと大人が先まわりして心配してやっけていても、うまくいかないんじゃないかな。逆に、苦しい思いをしたり、嫌な思いをしたり、そういう体験から、次に強くなっているってほしいなと思うんです。そうしないと、そんなことがあると言うと、本当にあるのかななんて思っている。だから、言っちゃいけないかなとは思ったんですけども、そういう苦しみとかも体験するということ。そういうことはしないほうがいいんだけど、そういうこともあるということをお認めた上で渡してしまうというのであれば、大人も覚悟して与える。そうしないと、何かうまくいかないんじゃないかなというか、そんな気がしますね。

自分があまり子どもと向き合っていないなかつたんですけども、忙しい中で、昔はそういうことはなかったから、遊びに行くとお言えば子どももついてきたり、中学生ぐらいまではするんですけども、山を登ったら苦しいとか、川に入ってもおししたら溺れるかもしれないけど、そう

いう冒険をしないと、うまくいかないかなと思って。そこから逃げるだけでは何かうまくいかない。スポーツであると、けがするときもあるよということをおかした上でやるんだという。すみません、話がまとまらないんですけれども、いつもプラスだけの学びじゃなくて、マイナスもある。そういうことも踏まえた上で体験しながらやっていく。それを大人は覚悟して見ていくという。

最後は親が面倒を見るけど、それぐらいの覚悟でそういうものを与えないと。与えないというか、もうあるんですものね。そこからは出られないですよ。いいものがいっぱいあると思うんですよ。最近SNSとかいろんな情報はどんどん、私達よりもすぐやってくれますよね。「これ、わからないんだけど」と言ったら、ググるとか言って、ぱーっとやって、こんなことですよと出ますから、すごいことではあるんですけど、体験して、いいも悪いも含めて、それをやるのに大人も関わるといふうに感じました。すみません、まとまりがない話を。

藤井委員長 ありがとうございました。時間も迫ってきたんですけれども、どなたか、最後、質問ございませんか。山田委員。

山田委員 SNSを使う場合に、家庭内で話し合うとかという話が出たんですけれども、今、実際に家族で話し合うという時間が本当にどれだけあるのか。要するに、非常に豊かな時代になって、子ども部屋があって、例えば御飯を食べたらすぐに子ども部屋に行ってしまうとか、あとは家庭での教育というんですか、それを逃れてみんな学校の先生に押しつけてしまうというか、何でも学校に文句を言うということも聞くんですけれども、どういう傾向になっているのかなというのが。質問とも意見ともとれないようなことですが、以上です。

藤井委員長 じゃ、今日の講演会を最後にまとめていただけるそうですので、大きくまとめていただきたいと思います。

小山田講師 大きくはまとめられないんですけれども、今日は私のほうのお話をきっかけで皆様がいろいろお話をしていただけたということはとてもよかったのかなと思います。本当にSNS等は便利なものではあるので、それをうまく便利なツールということで生かしていけるように、大人がどうやって子ども達に関わっていけるかという部分とも関係してくると思うので。本当に小金井の地域の皆様のすばらしい力って、私も住んでおりますけど、すごくあると思います。そういった皆さんのような地域の方々がこれからどうやって小金井の子ども達と関わって行って、豊かな小金井をさらに豊かな小金井にしていくって子ども達を育てていけるかというのは、みんなで協力しないとできない時代かなと思うので、家庭もですし、学校もですし、それから今、地域の力というのが非常に重要視されています。第三者の大人の関わりというのが。なので、そういったところで皆さんのお力をぜひ集約して、小金井の子ども達といろんな関わりが持てたらいいんじゃないかということで、まとめとさせていただきます。

藤井委員長 どうもありがとうございました。

2 報告事項

社会教育委員の会議議長 中村 彰宏 氏

藤井委員長 次の議題ですけれども、報告事項が中村議長のほうからあります。

中村議長 もう残り時間もわずかしかございませんので、手短にご報告させていただきます。今日の会議資料の中にございます2つの資料ですね。図書館協議会からの回答と公民館運営審議会からの回答。つまり、第二次小金井市生涯学習推進計画の評価に関わる調査ということでございます。時間をかけて検討していただいて、示唆に富んだ内容の評価をしていただきまして、本当にありがとうございます。この場をかりて厚く御礼申し上げます。

かいつまんで、ちょっとご説明させていただきますと、まず図書館協議会からのご回答についてなんですけれども、1ページ目の中段にございます第3節の第4項、施設の充実と有効活用の促進ということで、各委員からのご意見ということで、夜間貸し出し等について、これらの活動が書店を圧迫して、本・CD・DVD等の売れ行きを鈍らせて、挙げ句には作家の生計をも危ういものにしてはいけないということだと。互いに共栄・共存できる方法、例えば新作には一部利用者負担金が生じるという形なども今後は検討されるべきなのかもしれないということで、受益者負担ということでお書きいただいています。実は市のほうでも受益者負担という流れは、一部の公共施設の利用について受益者負担という方向性が今、出ております。例えば貫井北町センターの施設の中に陶芸の電子窯があるんですね。その電子窯の使用というのは電気が莫大にかかるということで、こういったものはやっぱり、私の個人的な意見ではありますけれども、受益者負担でなければならぬんじゃないかということだったりもいたします。ちょっと余談になりました。

それから、同じところで、各委員からのご意見で、本の個人貸出が年々少しずつだが減少しているのが気になる、原因を調べる必要があると思う。これは非常に大事なことになっております。ぜひ調査して、今後の計画に生かしていただきたいと思えます。

それから、第4節の連携・協働による施策の推進の中で、高齢化社会に対応して、保健所などとの連携も大事なことから考える、高齢者にも読書に親しんでもらうと。非常に大事な視点だなと思えました。

それから、連携の中で、1ページ目の最後のところに、農工大学で実施されている大学図書館との連携を拡大していく、今年度は農学部との連携を行う予定である、学芸大、法政大学工学部との連携を模索する。これも非常に鋭い指摘だなと思えました。

それから、次のページになりますが、各委員からのご意見という中で、第1節の第5項の枠の下のほうにありますけれども、これは第4章第4節とも関わってきます。学校と連携し、児童・生徒の図書館見学や職場体験を積極的に受け入れるとともに、図書館から学校に出向いて、利用案内やおはなし会等を行う。これは図書館と学校の連携ということで、こうい

ったことがどんどん促進されなければならないと思いますし、第3次生涯学習推進計画にぜひ盛り込んでいきたいなと思っています。

最後に、第2節のところで、鋭いご指摘がございました。高齢者の学習活動を支援するために、大型活字本の充実や資料の宅配サービスを実施する。これも非常に的確なご意見だと思いました。

図書館協議会の回答について若干コメントさせていただきました。

続きまして、公民館運営審議会からの回答をかいつまんでご説明申し上げます。

1 ページ目の冒頭でございます、第3章、計画の基本理念についてということで、次期計画では「共に教え合い 学び合い 共に育ち 実感する喜びを!! 生涯学習のまちづくり」のような表現の検討をお願いしたいと。すばらしいキャッチフレーズだなと感心いたしました。ありがとうございます。

それから、第4章、施策の展開の中で、第1節の3、青少年の健全育成、遊び場・居場所の確保ということで、「青少年の居場所」「楽器練習スタジオ」について施策を展開する事業として次期計画では追加することが望ましいというご指摘をいただいています。

それから、一番下の段に第2節の1の(1)学習情報提供の充実ということで、現行計画では「各種自主サークル講座」や「市民が作る自主講座」が掲載されていないが、市民の自主活動の支援として位置づけ、施策の展開に追加されたいというご指摘をいただいています。

飛びまして、2の(3)高齢者の社会参加と自主活動の支援の中で、貫井北分館の高齢者学級を追加する、また、高齢者学級以外の公民館事業が掲載されていないところであるが、「将棋大会」「子ども囲碁教室」を加えてはいかがかというご指摘をいただいています。

それから、3の(1)高齢者と異世代の交流促進という中で、公民館の事業内容等、ぬくい少年・少女囲碁クラブ大会、異世代交流講座ということで、現行の延伸された計画で廃止（終了）となっている。飛びまして、また、異世代交流講座の参加者は少ないが内容を吟味すればもう少し増えるのではないかと。鋭いご指摘だなと思いました。

飛びまして、3 ページ目の第3節、1の(1)市民のための講座ということで、公民館の事業内容等、各種講座の中で、「各種講座」ではわかりにくいということで、「成人学校」「まちづくり講座」「陶芸入門講座」「庭木剪定講座」、企画実行委員が企画したものは事業名を明記するなど工夫が必要であるというご指摘です。同じトーンで、(2)も「各種講座」ではわかりにくいというご指摘がありました。

それから一番最後、(4)人権尊重と男女平等の意識づくりの中で、4 ページ目に入りますけれども、現行計画では公民館事業の記載がない、人権尊重と男女平等の意識づくりは公民館はかなり熱心にやっているはずである、現在の市民がつくる自主講座のテーマだが、「子どもの人権講座」「男女共同参画講座」として記載すべきとご指摘を受けました。

それから、飛びまして、3の文化事業・イベントの推進、(4)イベン

トの活性化ですけれども、次期計画において親子映画鑑賞会の実施について検討をされたいということがございました。

そして、飛びまして、4ページ一番下、その他ということで、これは非常に鋭いご指摘ですが、全体を見るといろいろな担当（課）が入り乱れて、公民館でやるようなタイトルが他課の担当となっている例がある、また、公民館で実施しているにもかかわらず、事業の記載がないなど整理が必要である。これは第3次の計画に十分反映していきたいご指摘だと思います。

それから、飛びまして、下から4行目です。施策と事業の混在が見受けられるので、次期計画では改善されたいというご指摘がありました。

全般にわたって、これまでの評価もそうなんです、第3次の策定に役立つようなたくさんのご意見を両委員会のほうからいただいています。本当にありがとうございました。

それから、公運審さんのほうからは、特に貫井北町センター絡みの事業を次期計画として盛り込んでいくようなご指摘をかなりいただいておりますので、それは第3次に反映させるような形で策定をしたいと思います。

第2次小金井市生涯学習推進計画の評価にかかわる調査についてご報告させていただきました。

それから、図書館協議会、そして公運審の方々、それぞれ興味がおありの件で、今、小金井市の東センターに図書館と公民館の施設がありますが、それをNPOに委託する方向で行政のほうで動いておられるという中で、それと関連して、先般9月から10月にかけて貫井北町センターの委託に関する評価を皆さんにさせていただきました。その結果がまとまりました。これについては市のホームページにアップしてはおります。それと連動して、また、NPOへの委託ということで、東センターの図書館と公民館を業務委託する方向で動いておられるということで、昨日も東センターの利用者懇談会があって、この中にもご参加された方がいらっしゃると思いますので、一応動きとして、今、公民館と図書館がNPOに委託ということで動いているというご認識をいただければと思います。

それから、雑件ですけれども、特に図書館協議会の方に関するところで、先般11月1日、きたまちセンターで、ビブリオバトル、書評合戦のイベントがございました。これは公民館と図書館の共催事業ということで行われました。そして、その場にはこの中にいらっしゃる委員の方も私を含めて4名ご参加いただきました。非常に盛況で、8名の発表者、大学生4人、高校生4人ということで、それぞれ5分間の与えられた時間の中でお薦めの本を熱く語っておられました。そして、観客は30名ぐらい集まりまして、それぞれの高校生部門、大学生部門で、一番自分が読みたいなと思った本を選んだわけです。非常に盛り上がった、いい会であったなと思います。ご関係いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

以上、ご報告とさせていただきます。

藤井委員長 どうもありがとうございました。

3 次回日程について

藤井委員長 それでは、最後ですけれども、平成26年度は公民館が合同会議の事務局を担当しましたが、来年は図書館協議会のほうが事務局だと聞いております。来年度の日程その他は、もしここで発表いただけるなら、日程だけでもお願いできますか。

上石図書館長 図書館長です。来年度、図書館が所管となりますので、よろしく願いいたします。三者懇談会だけは日程を決めさせていただいております。来年の5月21日（木）午後2時から、こちらの801会議室、同じ会場です。よろしく願いいたします。

藤井委員長 ありがとうございました。ちょっと時間をオーバーしてしまったんですけれども、本日は、社会教育委員の小山田委員のご好意を得て、有意義な基調講演にはじまり、皆さんの関心のあるテーマに関してかたい話、やわらかい話等入り混じってはいましたが、委員の方々の様々なご意見や、日頃の思いをお互いに話し合う良い機会となりました。

このような合同会議を開催いたしまして、担当の公運審司会進行としては、内容についてはある程度満足していただけたかと思っております。本日はどうもありがとうございました。